

三内丸山遺跡の終焉 —縄文時代後期の遺物・遺構—

成田滋彦

1 はじめに

青森市に所在する三内丸山遺跡は、全国的に著名な遺跡となり、平成16年の11月において、三内丸山遺跡を訪れた見学者は400万人を越えた。いまや青森県の一大観光スポットになり、県内外から多くの観光客が訪れている。この人気のすごさは市民にとって誇りであり、名誉なことである。このことを、青森市民は認識しなければならないであろう。

さて、今回のテーマは、三内丸山遺跡の終焉はいつなのかという問題である。最近では、栄華をきわめた三内丸山の縄文都市が、縄文時代中期をもって崩壊するという物語的な表現は、あまり聞かれなくなり、多少はほつとしているが、それでは三内丸山遺跡の終焉はどうであったのか。今回は、このことについて、出土遺物を基に検討したいと思う。

それでは、その前に、三内丸山遺跡の開始はいつかということになるが、この遺跡に竪穴住居跡が初めて構築されたのは縄文時代前期中葉の円筒下層a式土器の時期であり、この段階から本格的に居住が開始されたと思われる。それ以前には、縄文時代早期中葉の白浜式、前期初頭の早稻田6類土器が断片的に南地区から出土しており(成田1995)、遺構は検出されていないものの、縄文時代早期中葉から断続的であるが、この遺跡で人々が活動していたと考えられる。

2 縄文時代後期の編年

三内丸山遺跡の調査報告書では、縄文時代後期の土器分類は、出土量の少なさから、縄文時代後期を第IV群土器とする大別分類が主であったが、2004年に至って『三内丸山遺跡23』の調査報告書(佐々木・田中2004)では、第IV群の土器をさらに1類と2類に細別している。その内容はつきの通りである(注1)。

1類 十腰内遺跡第I群以前に位置づけられるもの

2類 十腰内遺跡第I群に位置づけられるもの

以上であるが、東北地方北半部における後期初頭の土器編年は、1968年の磯崎正彦氏(今井・磯崎1968)の十腰内I群の提示後に、細別が試みられてきた。現在は、葛西勲(葛西1979)・本間宏(本間1987)・児玉大成(児玉2003)の諸氏や筆者編年(成田1986)の4人の編年案に分かれている。

しかし、これらの論考は土器型式の認識に違いがみられ、いまだ決着をみていない。そのため今回は、十腰内I式以前と十腰内I式に大別して記載する。

これは、前記の『三内丸山遺跡23』の土器分類にちかいものである。なお。十腰内I式以前における細別型式については、筆者編年を用いることとする。

3 三内丸山遺跡の縄文時代後期の遺物・遺構

(1) 遺物

① 土器

十腰内 I 式以前の土器群(図 1-1 ~ 23)

1 ~ 7 は、貼り付け文を主体としたモチーフの土器である。波状口縁の垂下部に渦巻文や縦位の粘土紐を貼り付けており、3 は粘土紐の上面に撫糸圧痕、2・6 は連続刺突の見られるもので、牛ヶ沢(3)式に相当する。

9・10 は、波状口縁と平口縁をもち口頸部が内反する深鉢形である。口唇部から胴部下半にかけての文様構成をとり、横位方向に展開する文様は磨消縄文が主体的である。沖附(2)式に相当する。

14~23 は、全体の形状がわかるものではないが、深鉢形が主である。文様は、二~三条の沈線を一単位として、縄文地文のうえに斜位に渦巻文を施している。弥栄平(2)式に相当する。

十腰内 I 式の土器群(図 2-1 ~ 24)

器種ごとに記載するが、深鉢形のものは、口頸部が内反し平口縁である。12・13 は横位沈線と弧状文を組み合わせたものである。また、8・9 は縦位と弧状の沈線文を組み合わせたものである。1・3 の壺形は、肩部が張りだした形態で、口頸部と胴部下半に横位の文様区画帯を構成し、横位に展開した入り組み文を施している。5 の鉢形は、底部から口唇部にかけて外反し、横位の区画帯内にカニ状文様と刺突を組み合わせた文様構成である。

本土器群をさらに細別すると、8・9 は十腰内 I 式の古段階に、1・5 は十腰内 I 式の新段階に位置づけられると思われる。

24 は、文様構成の面から十腰内 II 式の可能性も考えられる。

十腰内 V 式の土器群(図 2-25)

口頸部が長い注口形を呈する。口唇部寄り・口頸部・胴部に横位の沈線を巡らし、貼り付けが見られる。三内丸山遺跡では、出土数量が少ない型式の土器群である。

② 土偶(図 2-30・31)

表面採集資料であり、江坂輝彌氏がかつて、縄文時代前期の土偶として紹介したものである(江坂 1966)。十字型を呈し乳房部・へそ部に貼り付けが見られものである。この土偶については、鈴木克彦氏が前期説を否定し(鈴木 1985)、小笠原雅行氏は後期説をとっている(小笠原 1999)。筆者も土偶の形態上、縄文時代後期のもので、製作技法等から判断して十腰内 I 式期の所産と考えている。

(2) 遺構(図 2-26~29)

土坑が 1 基、北地区 B で検出されている。試掘調査のため完掘されていないが、残存部から判断すると円形を呈するものと思われる。開口部で長軸 136cm・短軸 135cm を測る。堆積土から後期土器が出土しており、十腰内 I 式期と考えられる(注 2)。

4 まとめ

前章の 3 では、縄文時代後期の遺物・遺構を紹介した。ここでは、これらの遺物・遺構を総合的に考えてみたい。

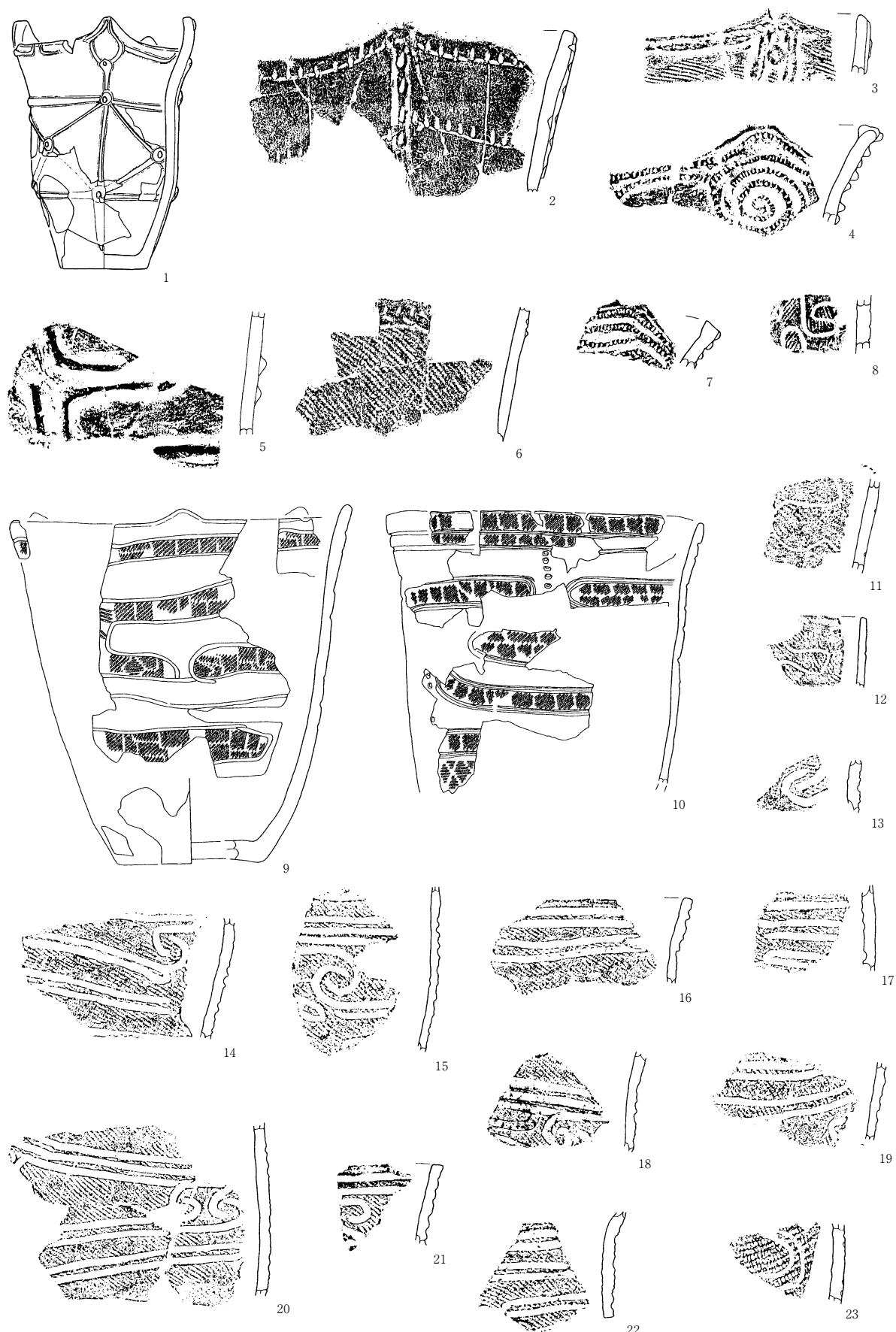


図1 十腰内I式以前の土器群

縮尺4分の1

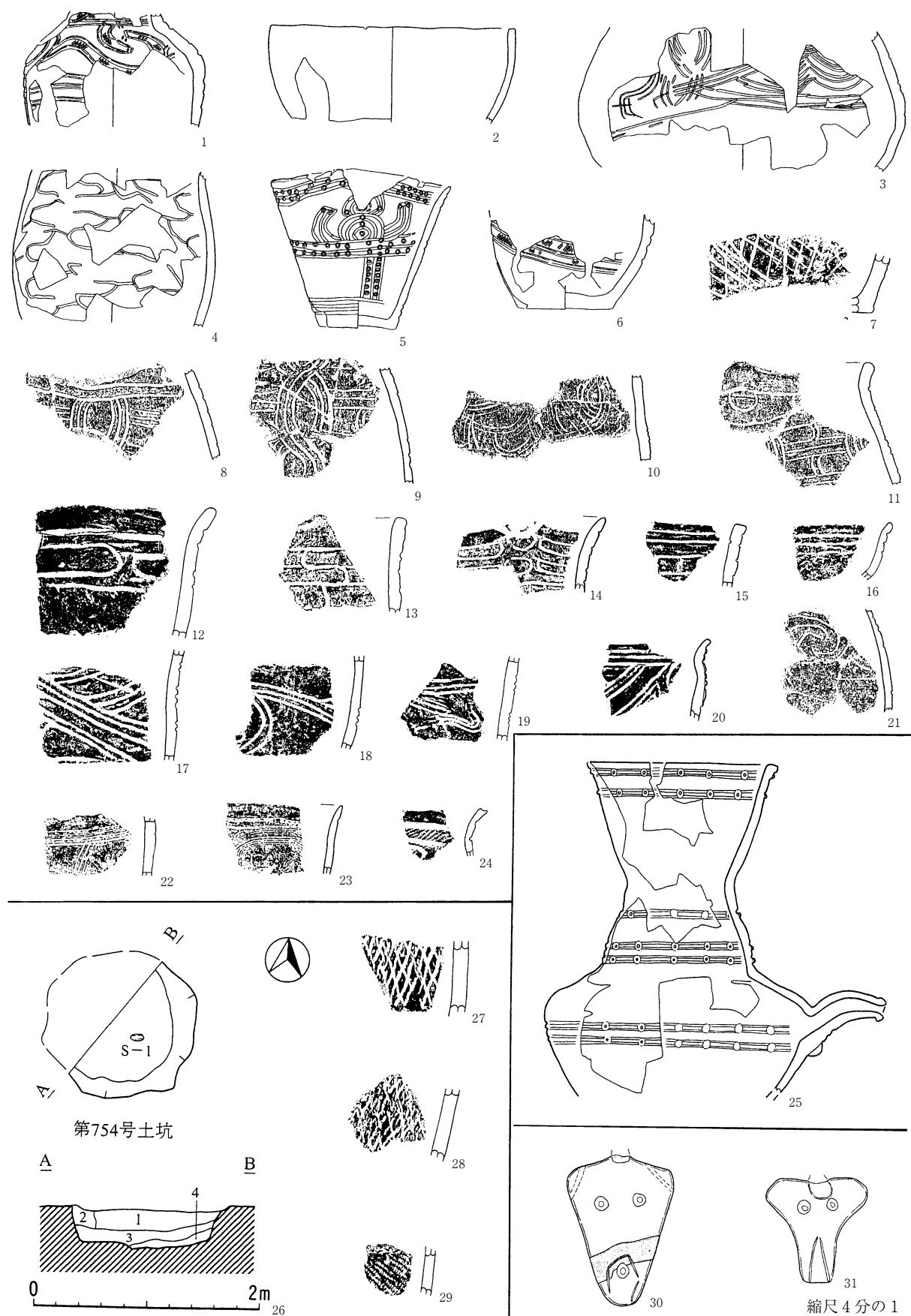


図2 十腰内I式・V式の土器群、土坑・土偶

まず、遺跡の空間は広大であるため、東西に流れる小河川を境に北地区と南地区とに大別し、さらに北地区の盛土範囲をA区、東側をB区、西側をC区に区分して述べる(注3)。

(1) 縄文時代中期末葉(大木10式併行期)(図3)

北地区Aにおいては、盛土を使用しなくなる段階であるが、住居・掘立柱建物が配置され、B区では粘土採掘穴が見られる。また、南地区では、土坑墓・埋設土器が見られるが、平坦面の使用が見られない。全体的に見れば、遺構の規模・範囲は小さくなるものの、各区における遺構の施設配置には変化が見られないものである。

(2) 縄文時代後期(後期初頭～十腰内I式)(図3)

遺構は北地区Bの土坑1基しか検出されていないが、遺物はすべての区にわたって分布しており、前段階の中期末葉の遺物分布の状況と同じである。

なお、A区の盛土は完全に使用されなくなり、盛土遺構のもつ機能は消滅したと思われる。そのため、A区の祭祀センター(注4)としての求心力はなくなり、周辺地区の集落維持ができなくなっていた時期であったと思われる。

このように二時期を空間的な分布上から見ると、中期末葉(大木10式併行期)では、遺物の分布は集落全体に広がり、複数の集中ブロックが見られるが、後期の段階においては、遺物は全体に分布しているものの、遺構は特定の区域に限定されるようである(注5)。

次に、縦軸の時間的な面から土器を見ると、後期初頭の牛ヶ沢(3)式期では、粘土紐の存在は確認されるものの、それらに伴う磨消縄文が見られず、十腰内I式期の段階では深鉢形が主体で他の器種が少なくなる点が指摘できる。つまり、土器から見ると、後期の段階では一連の土器型式は確認されるものの、各型式に見られる文様要素の欠如や器種構成の欠落が確認される。

遺構は土坑のみであり、他の遺構は検出されていない。

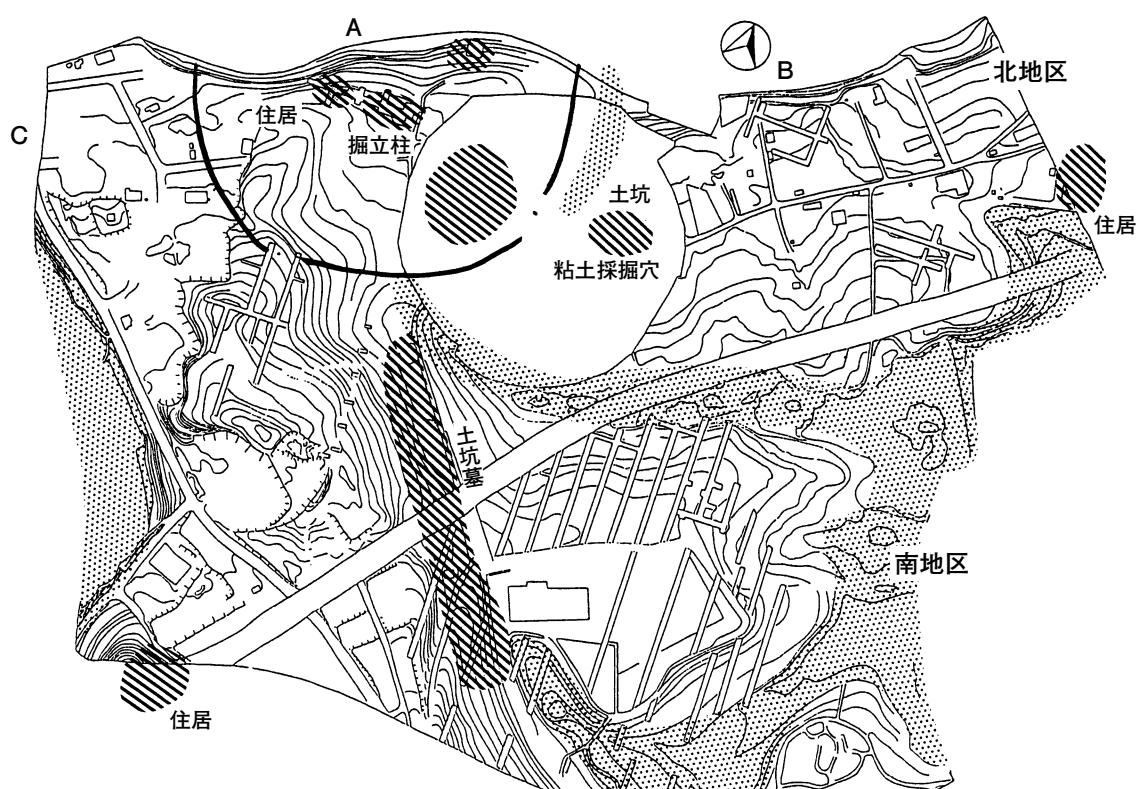
以上の遺物・遺構の面から整理してみると、三内丸山遺跡には縄文時代後期の段階は、初頭から十腰内I式土器まで継続して存在するが、その後に一時的に断絶したあと、後期末葉の十腰内V式土器の段階で再び活動が見られるようになる。

また、遺構及び土偶の存在などから、確かに集落の規模は小さいものの、集落は確実に存在していたことがうかがわれる。

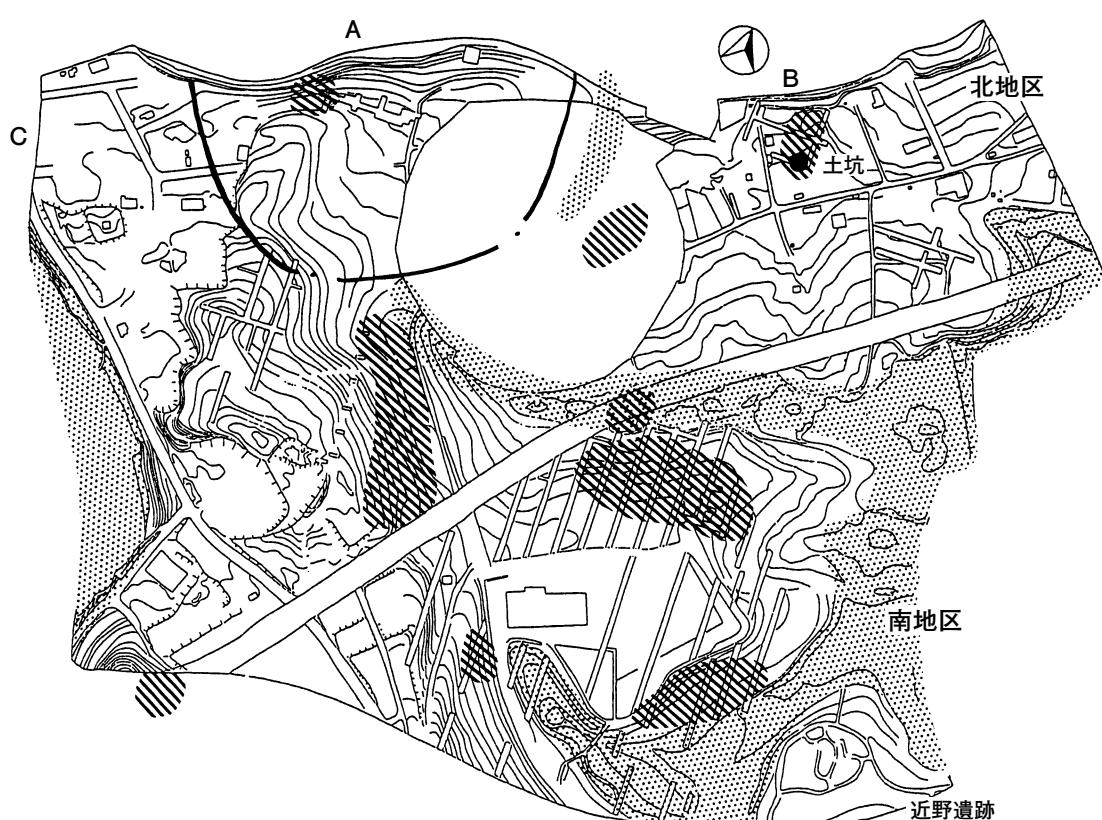
なお、三内丸山遺跡において、土器型式を保有していた集団が同一集団と仮定するならば、後期の段階では中期から継続しており、集団が断絶していたとは考えにくい。このことは中期末葉の大木10式併行期の土器分布と後期前葉の土器分布が、ほぼ合致する点が多いことも指摘できるため、別な集団とは考えにくいものである。

また、これほど大規模であった集落が、なぜ衰退したのかという点については、全国的な気候の冷涼化に伴うクリ林の崩壊に伴って、生業の基盤が崩壊したことが既に指摘されている(今村 1999)。このような自然環境の変化は、中部山岳地帯の遺跡数を例に、縄文時代中期の社会を崩壊に導いたとまでも述べられている(安田 1989)。

一方、山田昌久氏は三内丸山遺跡の終わりを「集中居住」から「分散居住」への変化であり、三内



中期末葉（大木10式併行期）



後期初頭～前葉（牛ヶ沢（3）式～十腰内I式）

斜線のスクリーントーンは遺物・遺構
一点破線は盛土範囲

図3 縄文時代中期末葉～後期の集落変遷

丸山遺跡の消滅は、集落の衰退を意味することにはならないと考えており、三内丸山遺跡の発展を「集中居住」のほかに、それに伴った集合装置の存在「…集団をまとめる集合装置(巨大木柱)や小道具(土偶の大量出土)から見て、集団維持のしくみは働いていた…」と指摘している(山田 1997)。

なお、小道具のひとつである土偶は、三内丸山遺跡から1,600点以上(注6)が出土しており、その数量は他の遺跡とは比較にならないほどで、この遺跡のもつ大きな特徴と言える。また、三内丸山遺跡の巨大化を考える一つのキーポイントとして、土偶を介した三内丸山遺跡と周辺遺跡を強く結びつけるリレーションの存在が考えられる。このリレーションとは、三内丸山遺跡と周辺の三内沢部遺跡(市川 1978)、三内丸山(6)遺跡(坂本・小笠原 2002)の関係であり、周辺遺跡から出土する土偶を製作技法等から観察すると、三内丸山遺跡の土偶と非常に類似した特徴をもっている。つまり、三内丸山遺跡と周辺の遺跡は、土偶を介した集落のつながりが強く、筆者はこの関係をリレーションという用語で表現したい。

これが、この遺跡における大規模集落の形成につながっていったと思われる。この土偶リレーションの崩壊こそが、大規模集落の崩壊に伴う一つの現象ではないかと筆者は考えている。

三内丸山遺跡の衰退は、生業の基盤であるクリ林の崩壊と集落構造の変化によるものであり、それに伴って、三内丸山遺跡を中心とした土偶リレーションの崩壊を招いたものと考えられる。しかし、この集落は小規模ながらも、縄文時代後期まで継続していたと考えられる。

本稿を今回まとめにあたり、三内丸山遺跡関連の調査報告書に記載された後期遺物を拾ってみたところ、意外にも縄文時代後期の資料が多いのに驚かされた。このことは、いかに筆者が三内丸山遺跡の調査報告書をよく読んでいなかったかということであり、おおいに反省させられたわけである。

三内丸山遺跡の調査報告書は毎年着実に刊行され、『青森県史別編 三内丸山遺跡』を含めると、いまや総ページ数は6,500ページを超えるという莫大な量になっている。今後は、この発表資料を基に、多くの研究者が、謎の多い三内丸山遺跡の解明に当たってほしいものである。

『注』

- (1) この分類の名称については、十腰内遺跡第I群という土器型式が認知されたものなのか疑問であり、何らかの説明が必要となろう。
- (2) 報告書では、後期初頭と記載しているが、その根拠は粗製縄文を施す土器によるものであろう。しかし、網目状撲糸文は継続期間に幅があり、北地区Bから十腰内I式土器が出土していることから、十腰内I式段階と筆者は考えている。
- (3) 図3は、『三内丸山遺跡VI』(岡田 1995)の図を一部修正して用いた。
- (4) 祭祀センターという用語は、盛土を中心として祭祀行為が行われていたのではないかということと、三内丸山遺跡の中心地であったという意味合いで用いた。
- (5) 北地区A・B区の野球場建設予定地及び谷部において、後期土器が少ない点については、まだすべての報告書が刊行されていないため、今後の報告に待たなければならぬ。
- (6) 土偶1,600点以上という数値は、『青森県史別編 三内丸山遺跡』(小笠原2002)の記載を引用した。1,600点は最終の数値ではなく、三内丸山遺跡をすべて調査した場合は4,000点以上の土偶が出土すると筆者は予想している。その根拠は1,600点×2.5(盛土1.5+捨て塚1の未調査部分)から算出したものである。

『引用・参考文献』

- 市川 金丸 1978 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 青森県教育委員会
 今井 富士雄・磯崎 正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山-岩木山山麓古代遺跡発掘調査報告書-』 岩木山刊行会
 今村 啓爾 1999 『縄文の実像を求めて』 吉川弘文館
 江坂 輝彌 1966 『土偶』 校倉書房

- 岡田 康博 1995 『三内丸山遺跡VI』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集 青森県教育委員会
小笠原 雅行 1994 『三内丸山(2)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集 青森県教育委員会
小笠原 雅行 1996 『三内丸山遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第204集 青森県教育委員会
小笠原 雅行 1998 『三内丸山遺跡X I』青森県埋蔵文化財調査報告書第251集 青森県教育委員会
小笠原 雅行 1999 「円筒土器文化圏における前期の土偶について」『土偶研究の地平』3 勉誠出版
小笠原 雅行 2002 『青森県史別編 三内丸山遺跡』青森県
葛西 功 1979 「十腰内I式土器群の編年的細分」『北奥古代文化』第11号 北奥古代文化研究会
児玉 大成 2003 「小牧野遺跡における縄文後期前半の土器編年」『第1回東北・北海道の十腰内I式再検討』 海峡
土器編年研究会
坂本 真弓・小笠原 雅行 2002 『三内丸山(6)遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第327集 青森県教育委員会
佐々木 雅裕・田中 珠美 2004 『三内丸山遺跡25—第23次・第26次調査報告書一』青森県埋蔵文化財調査報告書第381集
青森県教育委員会
鈴木 克彦 1985 「土偶の研究」『日高見国菊池啓治郎学兄還暦記念論集』 菊池啓治郎学兄還暦記念論集刊行会
長沼 圭一 1994 『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集 青森市教育
委員会
成田 滋彦 1986 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観第4巻 後期・晩期・続縄文』 小学館
成田 滋彦 1995 『三内丸山(2)遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第185集 青森県教育委員会
秦 光次郎 2004 『三内丸山遺跡24』青森県埋蔵文化財調査報告書第382集 青森県教育委員会
本間 宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古学研究会
安田 喜憲 1989 『文明は緑を食べる』読売選書24 読売新聞社
山田 昌久 1997 「縄紋集落の大きさとしくみ—縄紋都市説批判と東アジアの社会の一部分との三内丸山遺跡—」『縄文
都市を掘る』 日本放送出版協会